

◇ 2013年11月研究会報告（その1） ◇

「ル・ペルフォ608メシラの秘密」

会員番号 0022

高 島 鎮 雄

■ 設計者の個性丸出しのカメラ

11月の研究会発表ではテーマを1台の稀有なカメラに絞り、やや詳細に分析してみました。そのカメラとはフランス、リヨンのポール・ラシェーズが1952年頃に製作したプレスカメ

ラの“ル・ペルフォ608メシラ”(Le Perfo 608 Mécila)である(写真1、2)。先のフランスカメラ展にも出展されたからご覧になった方は少ないであろう。展覧会の時点ではAJCC会員の矢澤征一郎さんの所有であったが、そ

の後矢澤さんに懇望して譲っていただいた。ペンタックスギャラリーの旧古典カメラ研究会の同人だった矢澤さんがもう二十数年前にこのカメラを入手されたのは知っていたが、私が触れ得たのは1980年に出版されたBernard Vialの”Histoire des Appareils Français Période 1940-1960”と言う本に載ったたった1枚の写真であった。それがようやく手を触れ、その全容を知ることができたのである。

ポール・ラシェーズは同じ1952年にローライフレックス、同Tおよびローライマジック、ローライコード、セムフレックス用の150枚撮りマガジンをパリのフラッシュフォトから売り出している。それは10mの特製フィルムに6×6cm判を150枚撮るものである。メシラも含めてこのフィルムは幅61.7mmと書かれているので、てっきり特殊フィルムかと思ったが、今回ノギスで測って観たら120フィルムの幅は61.1mmであり、スプールの内寸は62.8～62.95mmであることが分かった。したがって一般に60mmとされている普通の120/220のフィルムで、ただ10mと長いだけである。フィルムは裏紙なしのようである。作られたメシラは全部で19台と言われており、全てが増加試作みたいなものだから、1台ずつ細部に変化があるようだ。本機はボディ・ナンバー201だが、同時に作られたMS80というマイクロフィルムカメラのナンバリングに含まれているらしい。

ポール・ラシェーズと言えば1955年に発売するプラスチック製の大量向け35mmカメラ、メシリュクスでも知られる(写真3)。メシリュクスの設計を見ても、ラシェーズという人が既成概念に捕らわれることを極度に嫌い、自分自

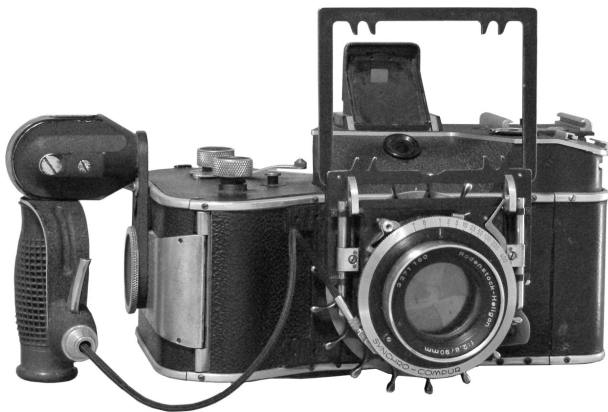


写真1 ル・ペルフォ 608 メシラ



写真2 裏蓋に付いたマーク
何やら象徴的だが、右に90度回すとMECILAと読める。

MECILAはMEcanique CInephoto LAcheizeの略。

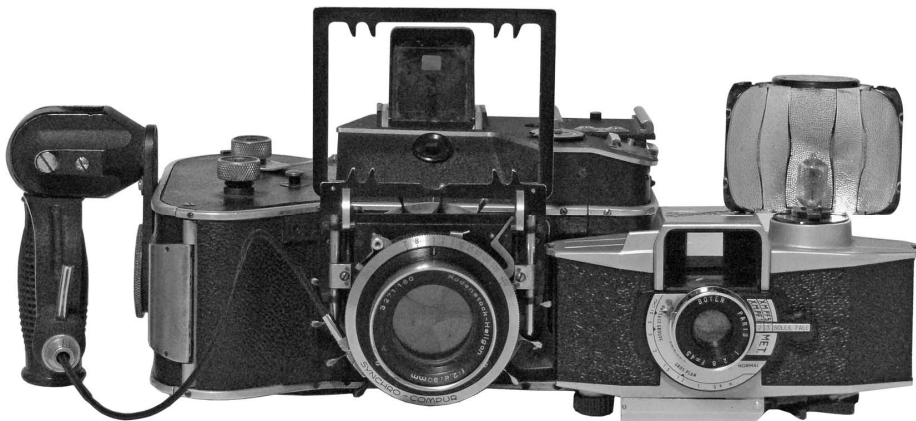


写真3 メシリュクスは35mmとしては大柄だが、メシラはこんなに大きい。



写真4 ファインダーをたたんだ携行時の姿

身の頭で考え、自分自身の手で作ることになった人であることが分かるが、メシラはそれに輪をかけたような個性的なカメラである。そうした意味で、ラシェーズは典型的なフランス人技術者であったと言える。

■ パララックス修正ファインダー

一般に知られるメシラはフランス製のキノブティック90mm F3レンズ付だが、本機にはローデンシュトックのヘリゴン90mm F2.8が1/400秒までのシンクロ・コンパーに入っている。レンズはシャッター、ヘリコイド、フレームファインダー一式の付いた前板ごと脱着できるが、交換レンズがあったか否かは不明である。なおレンズボードを外すにはその向かって右にある大型のロックレバーを垂直から水平に90度倒す(写真7、8)。なぜロックレバーがこれほどまで大きいかと言えば、それを倒す動作によってフィルム面に下から上へ遮光幕を引き上げるようになっているからである。これはなかなかよくできているが、ロックレバーのデザインや工作は素人っぽく垢抜けしない。レンズボードごと交換する方式(写真9)にもかかわらず、フィルムを巻き上げるとシャッターが自動的にセットされる。

レンズは直進ヘリコイドに入っており、特徴

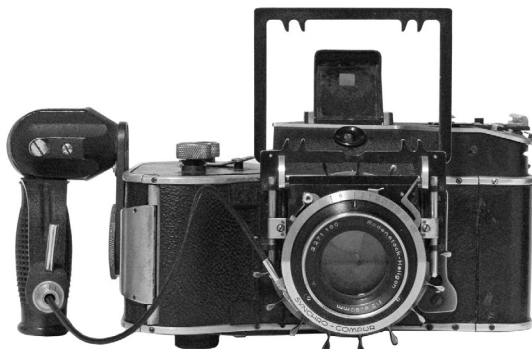


写真5 正面。横幅は本体のみで213mm、グリップ付で273mm。グリップ込みで2.3kg強もある。

ある17本の角のあるリングを340度ほど回すと14mmも進退し、∞から47cmまでピントが合わせられる。この近接撮影能力は6×8cmカメラとしては驚異的である。このヘリコイドリングの角はメシリュクスの“ひとで”みたいな巻き上げホイールにも共通するもので、多分ラシェーズの趣味なのであろう。実はメシラは距離計連動で、折りたたみのファインダーを立てると、視野内に上下像合致式の二重像が見える。小さな可動像はファインダー前方の斜面の円窓から取り入れる。正面から推察すると距離計のベースは30mmほどしか無く、しかも等倍だから90mm F2.8というレンズの測距には少々心もとない。ファインダーを立てると露出する45度のハーフミラーは、内側のミラー面がオレンジ色に着色されており、オレンジ色の景色の中に自然色の二重像が浮かぶ。概してこの連動距離計はカメラの諸性能に比べ力不足の感を否めない。

ビューファインダーは、レンズボードから引き上げる大型のフレーム式で、全体が6×8cm判で、6×6cm判と4.5×6cm判を示すダ

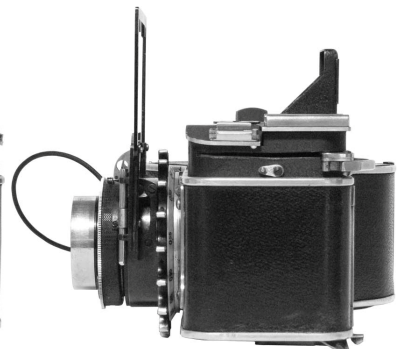


写真6 左側面 高さはファインダーを上げて145mm、格納時106mm、。奥行180mm。

ブルクオーテーションみたいな指標が付いている。この指標が、また17角の焦点調節リングとともにこのカメラの外観をおどろおどろしいものになっている。ファインダーのフレームは上下に14mm移動し、パララックスを自動的に修正する(写真10、11)。ヘリコイドによるレンズの進退をレバーで感知し、テコでファインダーフレームを上下させるもので、よくまあこんな複雑な仕掛けを考えたものと舌を巻かざるを得ない(写真12)。このファインダーはメシラの大きな特徴の一つである。

■ マルチフォーマット

冒頭にも述べたように、ル・ペルフォ608メシラは、ローライフレックス、セムフレックス用の150枚撮り長尺マガジンとほぼ同時に発表されている。どちらが先なのかはわからないし、もしかすると平行して開発されたものかも知れない。ただひとつ言えることは、平面形(写真13)でも分かるとおり、二眼レフ用長尺マガジンの前方に暗箱を作り付けてカメラに仕立てたものだということである。フィルムは



写真7 レンズ、シャッター回りのクローズアップ。直進ヘリコイドを回す“角”が不気味だ。



写真8 前板ロックを右へ90度倒すとフィルム前面に遮光幕が上がり、レンズ、シャッターが外れる。

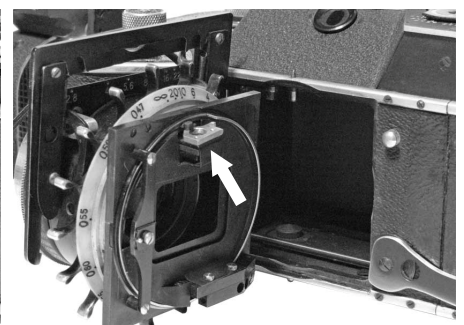


写真9 フィルムを巻き上げると、矢印のブロックが左へ押され、シャッターがセットされる。

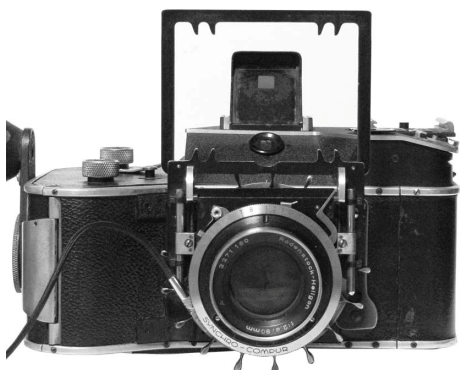


写真10 スポーツファインダーが最も高い位置にある∞時。上下に14mm自動調整される。

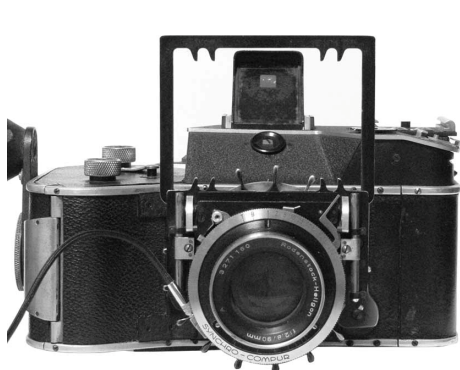


写真11 スポーツファインダーが最も下がった最近接47cm時。

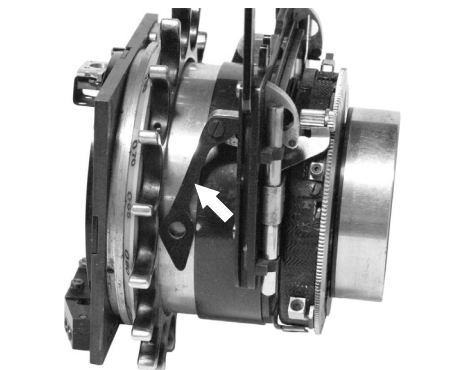


写真12 ヘリコイドによるレンズの14mmにも及ぶ進退を、矢印のレバーで感知し、テコでスポーツファインダーを押し上げる。

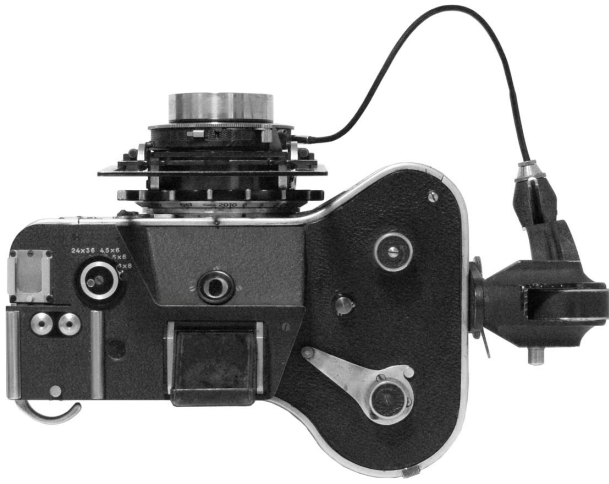


写真13 平面形。この中に二眼レフ用の長尺マガジンが含まれていると考えられる。

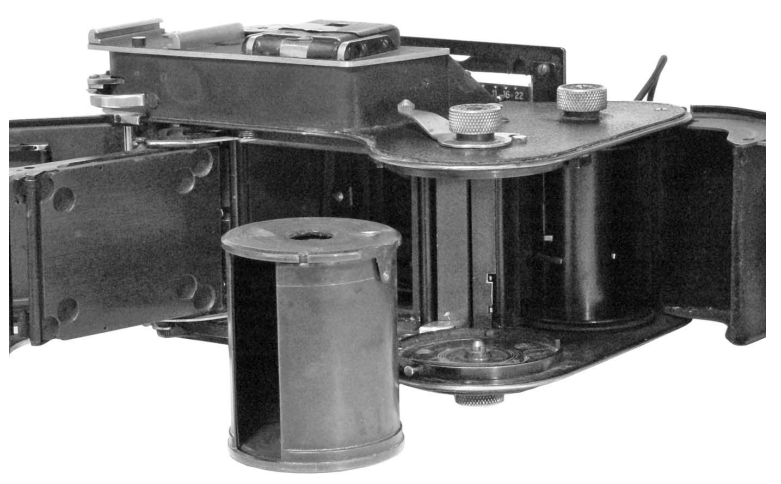


写真15 裏蓋は左右に開く。外に引き出してあるテイクアップ・マガジンは、セット(Sept)のそれを大きくしたような感じ。

右端前方のサブライマガジンから出て、焦点面を通過後左端で鋭くUターンして右端後方のテイクアップマガジンに巻き取られる(写真15)。ボディ上面右後方には裏蓋ロック用の長いレバーがある(写真14)。裏蓋ロックがなぜこんなに大きいかと言えば、それは内部のテイクアップマガジンの開閉も兼ねているからだ。テイクアップマガジンは一回り大きい、セット(Sept)のそれとよく似ている。長尺フィルムを用いるので、途中で現像する必要が生じたために、エキザクタやベギーのようなフィルムカッターを備えている(写真16)。

二眼レフ用の長尺マガジンは10mのフィルムに6×6cm判を150枚撮るが、メシラは6×8cm判の110枚撮りから、6×6cm判150枚撮り、4.5×6cm判の200枚撮り、果ては24×36mm判の250枚撮りまで変化するマルチフォーマット、あるいはバリエーションフレームである(写真17～20)。ボディ上面ファインダーの左にフォーマットの切り替えノブがある(写

真21)。ノブが薄い上に非常に重いので回しにくいのが難点だが、これを回すと内部でマスクが自動的に変化する(クリック付)。これだけでも大したものだが、フォーマットを切り替えるとボディ上端左後方隅にあるフィルム巻き上げレバー(自動巻止め)(写真22)の作動幅が自動的に変わり、フィルムの移送量が増減される。ここまで行き届いたマルチフォーマット・カメラを私はほかに知らない。本機には35mmフィルム用のマガジンが付属していないので、35mmフィルムをどのように使うのか分からない。ワンストローク、自動停止のフィルム送りとシャッターチャージが一つのレバーで行われるが、シャッターのレリーズとは関係プレーがないので、シャッターを切らないでフィルムを送ってしまい、空写しを喫する危険性がある。もっともプロの報道写真家はそんなヘマはしないだろうが…。

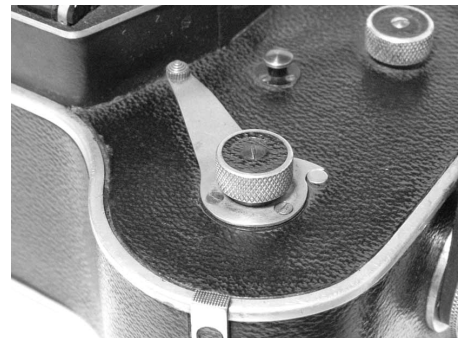


写真14 大きな裏蓋開閉レバーを左へ回すと、内部のマガジンが閉じられ、撮影済みのフィルムが取り出せる

私がル・ペルフォ608メシラにこの手で触れ、動かしてみた感想を一口で述べれば、「人間て一つの目的に対してこんなにも違った方法を考えられるんだ」という驚きである。

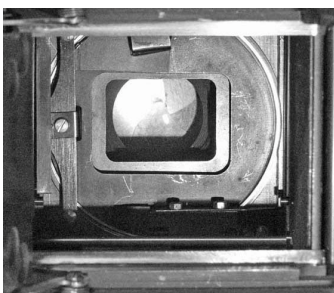


写真17 6×8cmのフィルムゲート。110枚撮り。

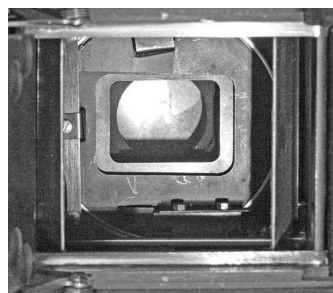


写真18 6×6cmのフィルムゲート。150枚撮り。

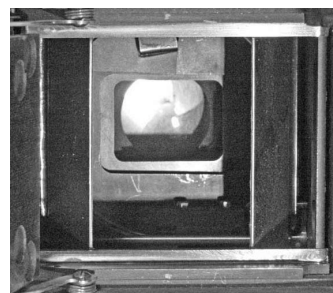


写真19 4.5×6cmのフィルムゲート。200枚撮り。

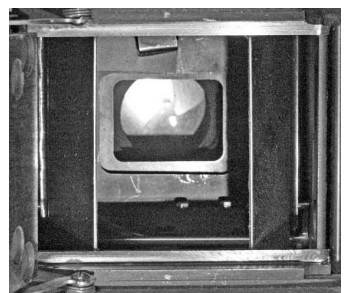


写真20 24×36mmのフィルムゲート。250枚撮り。

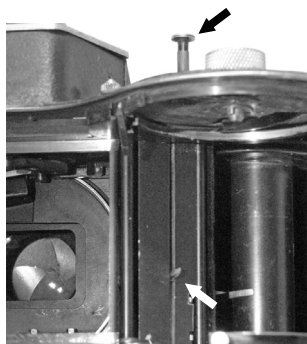


写真16フィルムを途中で現像する時のためのカッター。上の矢印のノブを引き上げると、下の矢印のナイフがフィルムを切断する。

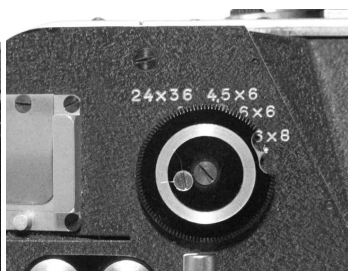


写真21 フィルムゲートをセレクトするノブ。写真では6×8cmを指している。



写真22 シングルストロークのフィルム/シャッター巻き上げレバー。普段はボディ側へたたまれている。

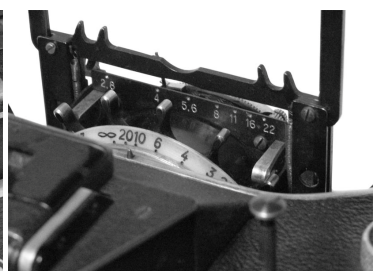


写真23 ファインダーから視線を外すと距離スケールと絞り値が読めるのは、ゴーモン/ルポルタージュなどフランスのプレスカメラの伝統なのかも知れない。